

耄老ぼうろうの海

馬場駿

この作品は一九九七年に『小田原文藝・羅二号』に発表したものを電子データとして残す際に馬場が全文にわたり現在レベルで再校閲したうえ一部補訂を凶ったものです。

二年ぶりに来た手紙に書かれていたのは「還る」の二文字だけだった。宛名の懐かしい文字に心ときめいた分、文面で落胆の度が増した。

もうかなり昔になるのだが、フォトコンテストでの受賞、写真店の開業、結婚とことあるごとに便りを貰ったが、いずれも伝えたいものがはつきりとしていた。今度の手紙はそういう意味では異質だ。差出人の住所の記載は無く、ただ哲郎の名だけが記されている。これではどこからどこへ還るのかさえ分からない。

「誰なの？ その間宮哲郎っていう人。初めて見る名前だよね」

昼食をとりに戻ってきた息子の圭一が覗きこむようにして言った。

「おまえが生まれる前だからもう五十年以上も前になるわね、大昔の恋人つてところかな」

佳江（よしえ）は少し照れながら応えた。

「へーえ、まだ生きてるの」

「それが医者と言う台詞？ 第一、感謝の気持ちが必要ないわよ、老人医療のお陰で食べてるみたいなものなの」

「だけど当時じゃ年下の彼って訳じゃないだろうし母さんはもう七十六だし」

「八十だと思ふ彼は。たしかに人生のおまけみたいな歳だわよ、耄碌（もうろく）の耄（もう）は一説によれば八十のことだって言うし。もっとも、わたしも似たようなものだけ」

佳江はそう言うて肩をすくめた。

「母さんは例外だよ、歳より若く見えるし元気だし、いつまでも居てもらわなくちゃ困るし」

「無理しなくてもいいわよ、宣子(のぶこ)さんが老人ホームのパンフ集めてるの、ちゃんと知ってるんだから。膝に爆弾抱えてて何時再発するかも分らないし、元氣って言えるかどうか」

圭一は気まずそうに眼を伏せると頭を掻きながら退避のために背中を向けた。

「宣子さん来ないの、お昼はどうするの？」

「診療報酬の計算に入っちゃったから出前で寿司でもとるって」

佳江は小さく笑った。自分だけ寿司をとって夫だけ自宅に帰す嫁も嫁なら言われるままに帰ってくる息子も息子だと。

佳江は溜息を一つすると封筒を三つ折りにしてエプロンのポケットにねじ込んだ。見詰めていれば「還る」の意味が解るといってもいいものでもない。それに「どうせ一人じゃ何と何が昼ご飯か分からない」と圭一の真似をして頭を掻きながらキッチンに移った。

その三日後、佳江宛てにまた封書が届いた。

差出人欄には輪瀉(わがた)町民生委員田原栄子とある。

「いい話じゃなさそうね」

佳江は開封しながらそうつぶやいた。

手紙によれば哲朗に依頼された通りに投函したものの、それだけでは意味が通じるはずがないと思ひ直し、一民生委員としての独自の判断で筆を執ったという。

そうはいつても手紙に書ける内容は限られている。「ぜひ一度お会いしてご相談いたしたく輪瀉町までお運びいただければ幸いに存じます」と、結局はそう書いてくるに決まっている。

佳江も先方の慎重な守秘の姿勢は正しいと思った。民生委員は哲郎の手紙の内容を知っている。

哲郎との間によほどの信頼関係があるに違いない。

その夜、佳江は手紙について概略を家族に話した。行くべきかどうかに迷いはあつたが、行くとなれば出掛けている間家事をする者がいなくなる。それで一応諮っておこうと思つたのだ。

「生活保護かなんか受けているんでしょ、その人。お母さま引き取つたりしないてくださいね。うちは医者だし、お金持ちだと思われているんですよ、冗談じゃないわ」

案の定、宣子は民生委員という言葉に過剰に反応してわめいた。確かに哲郎は向坂の家が開業医だとは知っているが、それを利用して庇護を求めてくるタイプの男ではない。

「宣子、話を飛躍させるな、母さんの良識を信じるよ」

これにはさすがの圭一もたしなめざるをえない。

「良識があるなら行かないで欲しいわ、昔の恋人だか何だか知らないけど、歳を考えてよ、迷つてゐるの見てるだけでも気持ちが悪いわ」

圭一に言つた「昔の恋人」がもう嫁の耳に入つていた。

「よせよ、そんな言い方」

佳江の非難の視線に圭一は慌てた。

実父の太一郎、婿養子だつた夫の守、息子の圭一と向坂医院の担い手は変わつても、向坂家の台所は佳江一人で賄つてきた。それだけに三人の器量や技量の差が否応なしに見えてくる。圭一は医学知識の広さだけが取り柄だつた。そのうえ口が軽い。佳江に言わせればそれだけで医師として失格だつた。

「だって見え見えじゃないの、向こうの考えなんて、下の世話なんて一人でたくさん」

「の、宣子！」

圭一の声に宣子は慌てて口を塞いだ。

佳江はこのときに輪瀉町行きを決めた。留守中の宣子の忙しさを想えばこそその遠慮だった。配慮のない者に対して配慮などするものかと、佳江は胸をざわつかせながらそう思った。

二

輪瀉町は漁業と温泉旅館業で成り立っている小さな町らしい。初めて訪れる佳江は、田原栄子に予め電話を入れておいた。輪瀉駅から栄子の指示通りに歩くと十数分で田原食堂に着いた。午後三時ちょうどだった。

中に入って声をかけると休憩中なのだろう、奥の方から返事がきた。

出てきた夫人が栄子らしいのだが、目を丸くしてその場に立ち尽くしている。

「向坂佳江です、失礼ですがあなたが民生委員の」

「あ、はい、田原です、ごめんなさい、ついそのお着物にびっくりしてしまって」

確かに小紋でも比較的高いものはあるが、着てきたのは普段着の類、家でも常に和装なのでそのまま出てきてしまったに過ぎない。佳江はむしろ絶句するほど驚かれたことが不思議だった。

「お電話いただいたときにお話しておくべきでした」と栄子は深々と頭を下げた。

佳江も訳がわからないままに辞儀を返した。

栄子は佳江を奥に通すとしきりに茶菓を勧めたが、一向に本題に入ろうとしない。

「向坂の家は開業医ですから少々のことでは驚きませんし、もちろん秘密を守る癖もついています」

佳江は焦れて栄子を促しにかかった。

「お医者さんの、そうでしたか。それでは安心して申し上げますが、間宮さんに痴呆の兆候があるんです」

栄子がようやくこの経緯を話し出した。

哲郎が輪瀉町に来たのは十年ほど前のことらしい。輪瀉温泉の旅館海王楼で雑役を五年ほどしたあと失業して生活保護の受給者になった。いま居る海辺の廃屋は元釣舟屋で、当初町が無償で貸したアパートを出て一時行方不明になったあと、いつの間にか戻って来て住み着いたという。電気も水道も廃されていたのだが、哲郎が施設に入るようにと説得に応じないため、命の維持に最低限必要な水道だけは町の負担で復旧された。季節が春から夏であったことも町が強制的に収容しなかった理由だという。寝たきりの病人という訳でもない。ところが町が送った医師が哲郎を診て脳動脈硬化症という所見を出した。町は人道的見地からも放っておけなくなり、係員を派遣して力づくで町立病院に収容した。しかし獣のように暴れた哲郎は精密検査も拒んで逃げ帰ってしまった。栄子は福祉事務所の依頼を受けて再び哲郎の担当になった。そして二キロも離れた廃屋に何日も通って、やっと得られた解決の糸口が佳江だったのだ。

「最初の手紙、あなたの目の前で書いたんですか」

佳江は栄子が内容を知っていたことにこだわりを持っていた。ふつう信書の中身までは調べない。「ええ、とにかくどなたかに連絡をと、わたしの方が必死でした。それで期待したら内容があれでしょ」

哲郎は「還る」と書けば解ると言ったという。

「どうやら哲郎に試されているらしい。栄子の口の動きを見詰めながら佳江は、どういう意味ですかと訊かれることを恐れた。」

「遠いご親戚の方、でもないですよね」

「栄子が覗き込むようにして訊いた。」

「佳江は鼓動が大きくなるのを感じて落ち着きを失った。」

「わたし、最初に間宮さんを担当したときにずいぶん調べたんです」

「栄子は五年前に哲郎の親族を捜しまくったという。」

「哲郎が五十歳で結婚しその二年後に別れた相手生方恵子は、結婚する際に定めた本籍地にそのまま住んでいた。」

「関係ありません、迷惑です」

「恵子はそう言つて横を向き、二十三歳になり結婚を控えた一人娘の真理子もその傍らで哲郎に対する非難の言葉を繰り返したという。」

「今度も一応連絡はとりました。相変わらずけんもほろろでしたけど、手続的にも真理子さんは分かっている唯一の血族でしたから」

「詳しい事情は知る由もないが栄子は凄く寒いものを感じたらしい。」

「結局独りなんですよね、人間て」

「あと何年もしないうちに自分もそうなる。いや今日明日にも突然襲つて来るかもしれない事態なのだ。佳江は他人事とは思わなかった。」

「まさか本当に来てくださると思いませんでした。まだ捨てたもんじゃないな世間もって、何だ

か嬉しい気持ちです。こんな仕事をしていると人の心の冷たさばかり目につきましてね」

栄子はそう言うのと丸い顔に笑窪をうかべた。

佳江も深い事情を知って来たわけではない。あまり感激されると気が重くなってくる。嫁の宣子に言われるまでもなく自分が下の世話を受ける一歩手前なのである。佳江は自分に何が求められているのかを知りたくなかった。

「医療保護を受けるように説得して欲しいんです。町立病院ではベッドを空けて待っています。先生の話では呼吸器系にも大きな疾患がありそうだということでした」

栄子によれば輪瀉町は福祉の町を標榜して久しく、哲郎に万一のことがあればその看板にキズがつくのだという。その意味では哲郎の件は小さいながらも町政に直結しているらしい。

「ごめんなさい、町のことは関係ないですよね」

栄子はお茶を淹れなおすと、そのまま黙った。

「いまお話の先生って往診してくださいました？」

佳江は話を元に戻した。

「ええ、樺山先生、内科担当の」

そう言われても佳江にはわからないが、名前はともかく所見の方は訊きたい。

「たしか肺線維症の恐れがあるとおっしゃって、X線写真で確認したかったようですけど、間宮さんがさっきお話した通りで」

佳江は頷いた。哲郎は肺結核で兵役を免れている。佳江が哲郎に命を救われた昭和二十年の春、その病気が無ければ疎開地での二人の劇的な出遭いは無かった。当時の哲郎の腺病質な容姿が佳江

の脳裏に蘇った。

「きょうはもう無理だと思っんです」

栄子はすぐにもも行きたい気持ちを抑えるようにして言った。廃屋に電気は無く、付近に街灯もない。既に陽は落ちていいる。満月の日でもなければ何も見えないし、車を降りてからの百メートルほどの道が特に危ないという。

「それと、お着物なんですけど…」

栄子はそれ以上言わなかった。

話を聞いた後では自分がいかに場違いな身なりで来たかがよく解る。しかし佳江はそれでも構わないと思つた。最初から汚れてもいい格好で哲郎の前に出るなど思いもよらない。それは想像するだけでも哀しかった。

輪湯町は温泉地なので宿には困らない。栄子は自分の親類を経由しててきばきと話を纏めてくれた。

「いつもいいお宿に泊まれるんでしょうね。この辺りの旅館はもともと湯治宿ですから貧弱な処は勘弁してください」

佳江は言葉だけではなくこのときはばかりは態度にも卑屈さが出た。

「夕食もお出しできるそうですから車でお送りします」

栄子はそう言うのと車のキーを手にした。

「ご面倒をお掛けします」

佳江は深々と頭を下げた。

「向坂さん、それ、わたしの台詞ですよ、困ったわ」
それでも栄子の眼は嬉しそうに和んだ。

三

宿は木造だった。海の見える部屋を望んだのだが、中庭の隅に佇む離れに通された。どうやら湯元・輪湯旅館の特別室らしい。もつとも誰かにそう言われたのではない、客室の構え、掛け軸、花瓶、襖絵等々で佳江が勝手にそう思ったに過ぎないのだが。

夕食の膳が整ったところで女将が挨拶に来た。もう六十近いと見たが所作の端々に色気がある。「あの、田原栄子さんのご親戚の方ですか？」

佳江はあまりの歓待ぶりを訝(いぶか)しく思っただけで訊(き)いてみた。

ところが、狭い町のこと、人となりは知っているが直接には関係がないという。話の様子では、予約の電話をしてきた人物が町の有力者らしい。

栄子に万が一にも負担がかかっては困る。佳江は女将にその電話の人物の名を訊いた。

「叱られます、勘弁してください」と、女将は微笑しながら何度も頭を下げた。

「明日、栄子さんに直接訊けばいいことだわ」

この業界にはこの業界のルールがあるに違いない。佳江はそう思い直してそれ以上尋ねるのを止めた。

食事の後で佳江は受話器をとった。圭一にも宣子にも黙って出てきている。さすがに心配しているだろうと思っただけだ。

「封筒の住所を見て局で調べた。さつき田原さんから大体の話も聞いた。人助けだし仕方がないよ」
電話に出たのが圭一で幸いだった。宣子なら感情が先走って言い合いになりかねない。そう思った矢先だった。「絶対引き取るなって言って！」と宣子の甲高い声が聞こえて急に風の音に変わった。宣子の声を聞かせまいとして圭一が受話器を手で覆ったに違いない。いつまでも続くその風音が寒かった。

「とにかく無茶しちやだめだよ」

宣子の攻撃が止まないのだろう、圭一はそれだけを言うと言電話を切った。

女が身の危険を感じる能力は野生動物に近いのかもしれない。子どものため、夫のため、家庭のためと、常に合理化によつて自分の行為を美化しながら、その実は自分自身を徹底的に守ろうとする。女はそれゆえに恥ずかしいほどの強さを持つ。自分もまたそうだから宣子を、その言葉を、憎もうとは思わない。ただ、そうまでして守りぬいた自分自身の価値に疑問を抱くときがくる。その時の女の脆（もろ）さを教えてやりたい。佳江はそう思うだけだった。

「お床をのべさせていただきます」

仲居の声に次の間に移った佳江は、タオルを手そのまま廊下に出た。

時間的なものなのだろう、大浴場には誰もいなかった。

浸かると湯が皮膚を突き抜けて体の中に入り、足元から徐々に満ちてくるような気がした。

温泉は久しぶりだった。五十六歳で亡くなった夫の守が連れて行ってくれた能登の和倉以来だから二十六年ぶりということになる。佳江は、お嬢さん、奥さん、お母さん、大奥さんと様々な呼ばれ方をしたが、その頭には必ず「医者」が付いていた。傍から見れば贅沢三昧の結構な身分に映

つていたに違いない。しかし実際には、来る日も来る日も台所に繋がれた文字通りの「おさんどん」でしかなかった。そればかりではない。旧家として体面こそなんとか保ったが、食うや食わずの生活も何度か経験した。特に初代の院長である実父の時代には雇えなくなったスタッフの代わりに院内のあれこれも担当させられている。

そう言えば、実父太郎が七十歳で物故してその五年後に夫守の死が来たのだが、圭一はそのとき二十五歳、まだ医学部に在学中の身だったので、佳江は守の恩師を尋ね医師を紹介してくれるよう懇願をしたことがある。結果週三日は大津竜彦という講師が来てくれることになったが通院患者は目に見えて減った。謝礼を払い、圭一の学費を納めた後に残る僅かな金でやりくりする生活が数年に亘って続いた。この間も初代のときと同じ役割を果たしている。

「宣子なんかにとやかく言われてたまるものですか」

佳江の想いは巡り巡ってそこに辿り着いた。先刻受話器を置いた後で滲んだ自分の涙の訳を知ったような気がした。

部屋に戻ると布団の上に風呂敷包みが置いてあった。

「風呂敷とは懐かしいわね」

佳江は微笑んで包みを解いた。婦人用のトレーナー、ブラウス、セーター、ソックスが出てきた。布団の脇を見ると紙袋がありそこには運動靴が…

「あらあら、町内会のお掃除といったところかしら」

袋の中にメモ書きを見つけると笑いながら灯りの下に移った。筆跡は栄子のものであった。

「お嫌でしょうが二回目から身につけてください。お着物が台無しになると判っていて視ているだ

けと言うのも何ですから。明日十時にお迎えにありがとうございます」

佳江は顔を引き締めると頭を下げて「ありがとうございます」と声に出して言った。

「二回目から」という言葉に優しさを感じた。長い間逢っていない男と女、たとえそれが耆老の域に達してからの再会であっても、一度は綺麗な姿を見せたいはずだと察してくれている。

「説得が難しいってことかな」

同じ言葉がそれを示唆しているようにもみえる。

風呂敷を抱えて次の間に移ったときに電話が鳴った。

出ると男の声だった。

「勝手を言うようですが、明日は午後一時過ぎまで舟源跡に居てくれませんか」

「舟源跡？」

「ああ、失礼、田原んとこの栄子と行くことになってる現場の事なんです、午前中はどうも時間がとれなくて、何せ急な話なもんで」

「あの、失礼ですがどちら様でしょうか」

「どちらさまって、参ったな。とにかく居てください。頼みましたよ」

「あ、もしかしたら病院の先生？ もしもし」

佳江は受話器を見詰めた。切れている。

そのままの姿勢でバッグを引き寄せ、栄子の電話番号がかかれたメモ用紙を引き寄せて取り出した。どういふことか確かめようと思ったのだ。

反射的に時計を見た。午後九時。佳江は溜息をつくとも電話から離れた。

哲郎に会いに來ただけなのに自分の知らないところで何か動いている。佳江は大仰に肩をすくめた。

四

翌朝の十時。栄子が出前に使うライトバンで迎えにきた。ロビーに出たとたんカメラのフラッシュを浴びた。他の客も撮られている。佳江は気にも留めなかった。

「今夜は珍しいお造りを板前に頼んでおきましたから」

女将がそう言つて送り出してくれた。

佳江自身は連泊の予約をしていない。しかし裏の事情が分かるまで流れに任せようと思つた。

女将は、お勘定は最後に纏めてと言つてきかなかつた。

和服のままの佳江を見ると、栄子は微笑してうなずいた。

佳江は栄子の後ろに広がっている青緑色の海に目を細めた。白い波がしらが何本もの破線を創り、整列しながら風下に向かつて動いている。

「こういうのを兎が跳んでるつて言うんですよ、この地方の人」

「あら、田原さん地元の人じゃないんですか」

「こゝみえても都会っ子です、わたし」

言い方が子どもの自慢の用で可愛かつた。

「行きましようか」

栄子の声を合図に二人は車に乗り込んだ。

「ゆっくりできましたか」

続けて栄子が、ギア変速を重ねながら言った。

「海の見える二人部屋が空いてるってことでしたからちよつと狭いかなって心配してました」

やはり特別室は栄子の手配ではなかった。

「町の有力者から旅館に予約の電話が入ったそうなの。田原さん、予約のこと、どなたに頼んでくだされたのかしら、待遇が良すぎてキツネにつままれたようでしたけど」

「夫の伯父が河岸(かし)に居ますからそのツテで。でも仮谷は有力者には程遠い人ですけど、へんねえ」

栄子が何度も首を傾げた。

「そんなに気にしないで。ただ、特別室に泊めていただいて恐縮してしまつて。一言お礼を言いたくて、それで」

「特別室ですか？」と栄子が目を丸くして佳江の方を向いた。

「あ、前から車！」

佳江の声に慌ててハンドルを切った栄子、車は町の広報車とぎりぎり擦れ違つた。

「それと、栄子さん、今日の一時頃誰かと約束していますか？」

「いえ、別に」

質問が素直さに欠けている。何も知らないらしい栄子に効くにはそれなりの配慮がある。そういう気持ちがあるので、佳江はついもつてまわつた言い方をしてしまう。

栄子が、広報車を後ろに見送った後で「まさか」とつぶやくように言った。

「何かわかりました？」

考えてみればこの質問も変だった。

栄子の返事はなく、佳江も考えを整理するために黙った。

車が停まった海岸は黒一色の岩が形作っていた。溶岩が海に流れ込んで冷やされた場所らしい「ここから歩きです、お荷物は車にそのままどうぞ」と栄子が言った。

道路が切れている。ただ、元は舟源まで続いていたというだけあって周囲の岩場よりは凹凸が少ない。

「一つだけお願いがあるんですけど」

栄子の言葉に佳江は足を止めた。強い潮風が佳江の背中を押している。

「目を逸らさないで欲しいんです」

栄子が視界を遮る自分の髪をかき上げながら言った。

佳江は気を引き締めてうなずいた。

「それ、お弁当？」

栄子が車を降りたときから手にしている荷物がある。佳江はずっと気になっていた。佳江の持ちは全て車内に置いておくように言われたのだから。

「ええ、今日は三人分のお弁当」

「今日はって、それじゃいつも？」

「うち、食堂ですけど弁当屋でもあるんです」と栄子は笑ってみせた。

まさか出前を頼まれているわけでもあるまい。無償の行為に違いない。佳江は哲郎のために何も用意してこなかったことを恥ずかしく思った。

廃屋の中に入った。饘(す)えた臭いとでも言うのだろうか、耐えがたい臭いがして佳江は思わず掌で口を覆った。

栄子とは見ると、首を振って佳江の所作をたしなめている。

佳江は慌てて掌を口元から離した。

「間宮さん、向坂さんが来てくれましたよ」

声が洞窟の中のように響いた。風で入口のドアが完全に閉じられ、中が一瞬真つ暗になった。横に窓はあったが古毛布のようなもので覆われている。昼間でも不気味だった。

奥の方で人が動く気配がした。

佳江は息を整えて哲郎の姿を待った。

「還る、それだけで解るといったはずです」

それは栄子への言葉だろう。声は何とか記憶に残っている、よくは見えないが背丈も合う気がした。哲郎に間違いはない。そう思った。

「着物か、佳江。死ねば一緒に焼かれてしまうぞ」

哲郎の眼は暗闇に慣れているらしい。

「綺麗な姿で間宮さんに逢いたかったのよ」

そう言いながら栄子は佳江の袖を引いた。

佳江は声を出せないでいる。このままでは今までの栄子の苦勞が水泡に帰す。分かっているの

だが佳江は衝撃を受けていた。想い出したのだ。

「還る」とは「心中してくれ」ということだ。そしてそれは二人にしか解らない暗号のようなものだった。

「笑いに来たのか」

過去に傾こうとする意識を哲郎の声が「いま」に引き戻した。

「向坂さんお願い、何か言って」

「見ろ、佳江、声が出るようにしてやる」

哲郎は横に動くと、カーテン代わりの古い毛布を下に引いた。力が足りないのだろう、その一部だけがめくられて、外からの光が帯状に差し込んだ。

佳江は息をのんだ。直視に耐えない顔形だった。涙、洩(はな)、涎(よだれ)、それら分泌物が乾燥し、器官の周りにこびりついている。額(ひたい)は後退し、髪は少ない分伸びきって寝ぐせのままに頭の右側を覆っている。頬骨は尖り眼窩(がんか)の形がくつきりと浮き出ている。皺首(しわくび)がそれを支え、その下は檻樓(ぼろ)が纏わりついている。手足の露出部分からみてミイラに近い状態なのに違いない。

「目を逸らさないで」

栄子の言葉が脳裏をかすめた。佳江はまさしく現実を見ている。目の前にあるのは醜悪な「若い」そのものだった。人の誕生直後のあの醜さは、明日の可愛らしさにつながるからこそ直視できる。しかし死に向かう途次のこの姿には救いがない。自分の明日をそこに見るときは尚更だった。

「これで終わったな、もういいから帰れ」

哲郎の口元が笑った。浮遊する小さな埃が哲郎の動きに合わせてキラキラしながら踊っている。高校生だった圭一がチンダル現象の一つだと教えてくれた。忌み嫌われている埃が満天の星にもまして美しく輝くことがある。不思議だった。

怒っている様子はない。佳江のこの反応は哲郎も予想はしていたらしい。

「来てくれただけで救われるものがあるしな」

哲郎はそう言うとき榮子に一札をした。

哲郎の中で今の今まで終わっていなかったもの、それと同じものが佳江の中には無かったのか。あつたから来た。しかし、「還る」の意味が解つても一緒に死のうとは思わない。それがかつての愛の証明になるとも思わない。では何ができるのか。何をしようというのか。佳江は心の整理がつかないまま佇んでいた。

「一言も言わないで帰るんですか。向坂さん、それでいいんですか。治療を勧めてください。治せばこの先も——」

「この先に何もなければわたしを呼んだのよ」

「え？」と榮子が佳江の顔を見た。

「一人で死ぬことも出来ずにね」

背を向けていた哲郎が腕を振るようにして振り返った。

「君に何ができる。親の言いなり、夫の言いなり、息子の言いなり、いつも自分を殺して生きて来て、今さら肉体の死に未練とは滑稽以外の何ものでもない。君と僕との差は一体何だ。その着物とこのボロとの差か？ 君も充分に醜い、程度の差でしかない。お互いに死を待たれている耆老(ぼ

うろう)なんだ、だから呼んだ」

「裏切りへの復讐ってわけ？」

「君は若くして死んだはずの人間だ、僕が今日までの五十年以上の生をあげた。あげた命を此処で返してもらおうとして何が悪い」

栄子が二人のやりとりを驚きの目で見ている。

「じゃあ、いっそ殺したら？」

「向坂さん、だめっ」

「その気なら君が婿養子をとったときにやっている」

「なぜ奪ってくれなかったの、父から、家から、世間体の殻の中から！ 弱かったのはわたしだけだなんて言わせないわよ、命はありがとう、今でも感謝してるわ、でも結婚できなかったのはあなたのせいよ、違う？」

「なぜ来た？ 還るの意味を忘れてたとしたら何をしにこんなところまで来た」

「医療保護を受けて」

「確かに聞いた、これでいいか。気が済んだか」

「脳が動脈硬化を起こしてるの。脳軟化って言った方がいい？ 肺線維症の疑いも濃いそうよ。死が勝手に来ることはあっても、自分から呼び寄せることないじゃない。お願い、栄子さんを困らせないで、病院に入って」

「生きる目的を注射してくれる病院ならな」

哲郎が片頬で自嘲気味に笑った。

「甘ったれないで」

「檻の外から偉そうに言うな」

「自分から心の檻を造ってるだけじゃない」

「君には見えないか、自分の目の外にいつの間にか造られた鉄格子が」

哲郎の体が大きく揺れて壁にもたれた。

と、そのとき。入口の戸が開いて数人の男がなだれ込んできて三人を囲んだ。

「カメラいいか、行くぞ」

「ちよつと何するの」

「栄子、いいから任せておけ」

「伯父さん、こんなこと聞いてないわよ！」

男たちは瞬く間にビデオ撮影の準備を整えた。

栄子はその中の一人に組み付いている。

「佳江、何の真似だ、これは」

哲郎が大声を出したとたんに咳き込んだ。

「埃を立てないで！ この人胸の病気なのよ！ 一体何なの、誰の許可をとってやってるの」

「いいかな、そろそろ」と、後から背広姿の小太りの男が歩み出た。

哲郎の咳は止まらないどころか激しさを増している。

「町長……」

栄子の声とカメラのフラッシュが同時になった。男は哲郎をさも労(いたわ)るようなポーズをと

りカメラに向かって笑みを送っている。

レンズは佳江や悦子にも向けられた。

佳江は栄子の顔をじっと見た。

栄子は後退りをしながら首を振って否定している。おそらく本当に知らなかったのだろう。昨晩からの不信な出来事の一つ一つに得心がいった。

「もういいな、臭くてたまらん」

町長と呼ばれた男はそう言う足早に出て行った。

「伯父さん、ひどすぎます」

栄子が白髪 of 男の背を突いて言った。河岸の飯谷という伯父さんに違いない。佳江は小さな憤りを感じた。しかし、ここで何か言えば栄子を責めるのと同じになる。

佳江は哲郎の傍に寄った。

背中を擦(さす)るぐらいしかできない。掌が痛いと感じるほど肩甲骨の周りに肉が無かった。

「汚れるぞ着物が」

哲郎が浅い息をしながら言った。

「ばかね」と言つて肩を抱いたときに涙が溢れ出た。

「栄子さん、お願い。横にさせたいの」

「ごめんなさい、一と月後に町長選挙があるの。まさかお二人のことが利用されるなんて」

佳江は栄子の手を借りて哲郎を寢床に運ぶと、「ただで利用させるものですか」と、表に飛び出した。

「町長、もう少し右に。その方が絵的に良いんで」とカメラマン。

案の定、外での撮影はまだ続いていた。

「ここか、確かに建物が移った方がいいな」

青空の下で見ると町長もかなりお人好しの顔をしている。

佳江は町長の斜め前に回って深々と頭を下げた。

「おーっ」と、居並ぶカメラマンたちは一斉にシャッターをきった。

「絵としてはこれが一番だと思えますけど」

「いやさすがに心得ておられる。助かります。この町は土地柄ですか、福祉しか票にならないので。その中でも老人福祉、これですわ。ああして乞食同然になっても見捨てない。これはインパクトがあります。いやー、ありがと」

「ほんとに見捨てないでくださいますね、町長。私はしばらくこの町に居ます。今のお話が口だけでしたら黙っていませんのでそのおつもりで」

「何でも相談に乗ります。嘘は票にならないし」

そう言うと町長は佳江から遠ざかった。

「ではまた。今度はこちらから町役場に参ります」

佳江は目で町長を追いながら言った。

「町長、早く来て良かったでしょ、午後一時なんて言ったらどうなってたか」
仮谷が町長に侍(はべ)るようになって纏(まと)わりついた。

二十四の遅い春だった。

佳江は山間の郷美篤村(みすずむら)に来ていた。父親太一郎の伯父にあたる夫婦が僅かばかりの田畑を耕して静かに暮らしている。昭和二十年、三カ月後には終戦になるというところだった。その当時はなぜ美篤村に送られたのか得心がいかなかった。おそらく東京に住んでいて万一のことがあれば直系が絶えると考え、太一郎が仕組んだのだろう。

国家が張った緊張の糸は確かに山村の一部に影響を与えていたが、佳江の周りは穏やかだった。この年まで胸をときめかす男がいなかったと言えば嘘になる。それが医学生であれば何の問題も無かったのだが、佳江は不思議に或る種危険な青年に心惹かれることが多かった。小説家志望の学生、世の中を変えると豪語する活動家青年、医院に来る一つことに思い詰めた表情の男たちがそれだ。太一郎は佳江の態度でそれと分かると、あの手この手で男たちを遠ざけた。結果、幸か不幸かは微妙なところだが、肉体関係にまで至った恋愛は一度もない。佳江の中には行き場のない情熱が溜まっていた。

哲郎との出会いがその情熱を一気に湧出させる。

美篤村の中央を財田川という川が流れている。この川が急襲した豪雨で水かさが増した。雨上がり、佳江は土手の頂すれすれにまで迫った流れを見に一人木製の掛け橋の上に立っていた。誰もが危険と分るこの橋から案の定佳江は落ちた。この危険行為がもとで自殺ではないかと噂されました。佳江は全く泳げなかった。落ちてすぐ水を呑み水中でもがきながらすぐに来るだろう死を思った。

あらゆる器官が水に浸されたと感じたときに意識を失っている。どれだけ時間が経ったのか、目を開けた佳江は生きていると実感するまでに十数秒を要した。見知らぬ瘦身の男が半裸で立っていた。佳江は反射的に身を起して自分の体を恐る恐る見ると、男ものの浴衣が肌を覆っていた。

「岸で救急措置をしたときに一回、目を開けたみたいだったけど覚えてないかもしれないね、とにかく息を吹き返して良かった」

男は小さく息を吐くと穏やかに微笑した。

佳江はこのときの哲郎の笑顔を一生涯忘れないでいようと思った。

「そうだったんですか」

栄子が上体を揺らすようにしてうなずいた。

町立病院の待合室にはもう他に人影はない。佳江は誰も視ていないテレビをリモコンスイッチで消した。どこに何があるかは十分に承知している。

「樺山先生、遅いわね。明るいうちに往診してもらわないと、間宮さんの容態が悪くなりそうで心配だわ」

栄子が時計を見ながら言った、樺山医院ではなく町立病院で会うことになっていたのだ。

「急変はないと思うけど」

そう言う佳江にも当然ながら確信はない。

哲郎は頑として動こうとはしなかった。町長の訪問が哲郎の心の殻を一層硬くしたに違いない。

佳江は栄子の車で来た。事実上の主治医である樺山医師に継(すが)ろうと思ったのだ。

しかし受付に話すと勤務日に違ひはないが往診中だという。二人は来院の趣旨を伝えたくて待つしか方法が無かつた。

「その後恋愛に発展したんですね」

栄子が話を遠い過去に引き戻した。

佳江を救助したときの無理が祟(た)つたらしく、哲郎がその日の夜に高熱を發して倒れた。村の診療所の老医師によれば急性肺炎だつた。佳江は責任を感じて三日三晩、哲郎の傍に居て看病を続けた。その間不思議に思ったことがある。哲郎の親戚を含め誰一人として見舞に來ないのだ。佳江を迎えに來た父太一郎の伯父も外から手招きをするだけで部屋には入らない。佳江は思い切つて老医師に聞いてみた。

「哲郎は肺病でな、皆うつるからと言つて寄り付かん」

肺結核は厄介だ、特に貧しいものには致命的な疾病で、かなり長い期間安静にして、栄養を十分に摂り薬で抑え込む、その全てが家庭經濟を脅かすものだからだ。老医師はそういう適切な措置が全く不可能なら不治の病と言つてもいいと教えてくれた。

「感染しても発病するとは限らん。ま、こんなことをこんな田舎で演説しても始まらんがね。あんたはびっくりせんのか、逃げ出してもいいぞ。もう肺炎の方は峠を越えたし」

確かに哲郎の熱は下がり始めていた。

「父が医者ですから、門前小僧習わぬ何とかで普通の人よりは知っています」

「この病氣の怖さもな。それでも傍に居てやるか、捨てたものではないな都会の女も。もっとも哲

郎のお陰で拾った命、恩返しという考え方もある」

「はい、一所懸命看病します」

「それは有難いが、あんたも眠らんとな。そこに添い寝すればいい。なに、うつるからと誰も覗きには来んよ」

老医師はそう言うのを笑さずに笑った。

哲郎の体は普段でも弱かったため快復が予想以上に遅れた。佳江は心を痛める反面、長く哲郎の許へ通えることを喜んだ。戦時下ではあつたが、経緯(いきさつ)が経緯だけに問題視する者もなく、むしろ一部では美談として語られた。

二人が肉体的に結ばれたのは水害事故から半月ほど頃だった。哲郎も初めてであり、技巧も何もない文字通りの結合でしかなかった。しかし佳江は全身を熱くして歓びの波を哲郎に伝えた。後に守と結婚して数えきれないほど夫婦の営みをしたが、このときほどの快感は一度もない。心が体をリードしたと、佳江はそう解釈している。

「熱のせいじゃないかな、夢の中で僕が君の手を引いて道を歩いているんだ、内臓まで染み入るような青一色の中をね」

哲郎は佳江を抱きながらそう言った

「まるで芝居の道行(みちゆき)みたいだった。もし財田川で二人とも溺れたらあんな具合にあの世に行くのかな」

「多分私が呼び戻しに行ったのよ。で、手をつかまえてこの世に還る途中。見たのはその丁度場面よ、きつと」

「じゃ、僕は君に助けられたわけだ」

「そう、おあいこ」

二人は微笑を送りあつた。

「唇、吸っていい？」

「うつるよ、僕、結核なんだ」

「わたし平気。一緒に死んでもいいもの」

そう言うとき佳江は潤んだ瞳で哲郎を見詰めた。

辿り着いた記憶のすべてを口にしたのではない。そこには当然取捨選択があつたのだが、栄子には充分伝わつたらしく、頻（しきり）にうなずいていた。

「わたし、もう一度言ってきます」

佳江は再び受付に向かった。時刻は午後三時、暗くなつては目的が果たせない。

樺山医師はまだ戻っていないかつた。

「こうなつたら救急車しか手がないわ」

栄子が佳江を促すと事務室の扉を叩いた。事情を説明し了解をとつて電話を入れた。ところが消防署が難色を示した。哲郎のことはかなり知られているらしく場所を言つたとたん渋り出したのだ。

「いいわ、町長に言いつけるから。待ってらっしゃい」

電話を替つた佳江が痲癩（かんしゃく）を起して怒鳴つた。

事務室の中の目という目が佳江に注がれた。

これで哲郎が病院に來た時に待遇が違ふはずだと、佳江は心の中で舌をペロリと出した。電話を切つて間もなく消防署から出動する旨の連絡が來た。慌てていたのは言うまでもない。

現場に來た隊員はさすがに機敏だった。佳江と栄子が付いたときには既に担架を廃屋の中に入れていた。しかし二人の隊員は、奥の方を向いたまま立ち尽くしている。佳江は不思議に思つて隊員の前に回つた。

「これでも連れて行く気か」

哲郎が息を弾ませて仁王立ちしている。暗い室内に大便の臭いが充満していた。目を凝らすと哲郎は、体中に自分の軟便を塗りたくつてゐる。

佳江はその場で氣を失いそうになつた。

六

佳江は自宅へ帰りたくなつた。佳江にとつて哲郎とのことは甘く切ない思い出だった。それが無残なまでに壞されていくのが辛かつた。それに、栄子からの依頼には既にこの時点で応えている。明日、朝一番で東京に還つたからと言つて誰からも責められることはない。

佳江は輪瀉旅館の一室で独り海を見ていた。事情がはつきりしたので特別室は辞退した。女将も内証は心苦しかつたとみえて、佳江が普通の客になつてからの方が明るく接してくれた。昨日の手配は助役であることも分かつた。当の本人に裏の事情が知られたとあつては女将の口も軽い。刈谷が町長に擦り寄つたのは春の改選で漁業組合長の座を狙つてゐるからだという。その町長が落選し

ては元も子もないということだろう。

「この町の人口の半分は六十歳以上の高齢者なんです。しかも女中さん、番頭さん、芸者さん、マッサージ師さんなど老後に不安を抱えた人が大部分で。福祉を公約に掲げても実行できるのはほんの一部なんですけど、そこは人間弱くて、ついつい一票を入れてしまっんです。漁師さんだつて同じでしょう」

女将は十分まくしたてて出て行った。その直後だけに、自分の耳鳴りが聞こえるほどに静かだった。漁火が二つ、黒い海に光の帯を垂らしている。

佳江は急に目頭が熱くなった。目の前の海の暗さに続くあの廃墟で、汚物に塗(まみ)れた服のまま独りうずくまっている哲郎を想ったのだ。

哲郎がこれほどまでに治療や入院を拒むのは何故なのか、それを探らなければ何をしても無駄なような気がする。佳江は、救急隊員に怒鳴ったその後で佳江を見詰めた哲郎の顔を思い出した。目が潤み唇は小刻みに震えていた。寒いからではない。欲するものを理解してもらえないという哲郎のもどかしさと悔しさが伝わってきた。もしも哲郎がいまだに佳江を最も信頼できる対象として考えているとしたら、その不満の度合いは想像を絶するものがある。しかしそうは思いたくない。苦し過ぎる。佳江はどこかで逃げ道を探している自分を見つけた。哲郎は死を恐れてはいない。とすれば、佳江に延命のための助力は期待していいことになる。

「還る」哲郎は手紙で望むものをこの二文字に籠めた。美簗村で哲郎が見た夢では、死が「往く」で生が「還る」だった。だから佳江は一緒に死ぬことを選択せずそれを止めたのではなかったか。「死なせないでくれ」むしろその意味にとるべきか。いや、哲郎の言動はその解釈を明らかに否定

している。

「哲郎、何をして欲しいの」

佳江は窓辺で潮風を受けながら口に出してそう訊いた。

電話が鳴ったので出ると、「東京の向坂さまから」とフロントが言った。

「いつまで居る気？ 母さん」

圭一だった。佳江は傍に宣子が要るかどうかを真つ先に訊いた。言い争うだけの気力が残っていない。いればすぐに受話器を置く気でいたが、外出してるといふ。

「もう少しこつちに居るから」

「居て何がどうなるの？ その人に責任をとるのは少なくとも母さんじゃないでしょ、宣子はヒス起こすし、千加子はご飯がまずいって騒ぐし、洗濯機の中は女の下着で一杯だし、頼むよ、母さん、たった二日でこの始末なんだ」

「そんなことを言うためにかけたの。切るわよ」

「待ってよ、宣子や千加子に何て言えばいいの」

「私はお前たちの給食担当でも洗濯婆さんでもないの。私だつてもう長くはないのよ、家事ぐらい女二人にしっかりとやらせたらどうなの」

「じゃあ言わせてもらおうよ。生きながら死んでるようなアカの他人と家族とどっちが大事なの」

佳江はこのとき一呼吸開けて「あっ」と声を出してから続けた、「お前、いま何て言った？」

圭一は攻撃されたと思つたのか、声を荒げて二度も繰り返した。

佳江は黙って受話器を置いた。

哲郎は生きながらにして死んでいたので。それが肉体的な死を目前にして少しの間でも生き返りたいと動き出した。心が「還る」ことを欲したので、肉体ではない。それには自分が必要だったのだ。哲郎は二人だけの暗号を使いそれに賭けた。もしも自分がそれを無視して来ないか、来てても意味が解らないときは死んだ心のまま従容として肉体の死を迎える気だったのではないか。そう考えればすべてに説明がつく。哲郎が何を求めているかが解る。佳江は漸く気づいて溜息をついた。速く面倒なことを済ませて帰りたい、そういう気持ちで治療や入院を勧め、救急車を送った自分、浮ついた感情や見栄で場違いな着物姿で栄子を困らせた自分、いや、それよりも哲郎の最期の言葉に等しい暗号をそれと気づかなかつた自分、佳江はそういう自分が情けなかつた。

自分の死期を悟ったとき、逝く前に誰に逢いたいと思うだろう。佳江は自分に置き換えて考えてみた。それは圭一でも千加子でもなく哲郎だ。何度聞きなおしても心がそう答えてくる。日常生活の永遠の消失が死である以上、その間際にいる者を支配するのは非日常の世界だ。そこには遠慮も外聞もない。法律も無ければ常識もない。あるのは炎が消える前の激しい命の閃光だけなのだ。

「わたしは哲郎に選ばれたんだわ」

佳江はあらためてそう思った。

七

翌日。佳江は朝一番で田村食堂に向かった。

もう胸につかえているものはない。今しなければならぬことを一心不乱にするだけだと決める
と、不思議に笑みさえ浮かんだ。

栄子が佳江の顔を見るなり地元の新聞を広げて「ごめんなさい」と頭を下げた。

「三沢町長、廢墟の老人を慰問。老人福祉の原点を見る思い」という小見出しの下に大きな写真があった。咳き込んでいる哲郎の肩に手をかけて微笑む町長がいかにも得意げだった。記事は二面と三面を独占し、佳江が辞儀をしている写真は三面の左端にあった。

「特にその辺りの記事なんです。向坂さんの元愛人て書かれています。：わたし、訊かれたときもつとちやんと説明したつもりなんですけど」

「そのとおりなもの、いいわよ」

愛人と書いた後で常人には理解し難い二人の関係を付けても概念的に混乱をするだけだ。愛人も構わないと、佳江は栄子に微笑してみせた。

「記事が出ていろいろ頼みやすくなったわ」

「町長に？」

「ええ。それと田村さんにもお願いがたくさんあって書いて来たの」

佳江は旅館の便箋にびっしりと書き込んだ買物表を手渡した。哲郎用の衣類、佳江用の衣類、洗面具などの日用品、布団や毛布などの寝具、灯油ランプ等々――

「えっ、この一眼レフカメラってあの高価な？ 記念撮影用ならもっと安価なものありますけど」
栄子が読むのを止めて顔をあげた。

「中古でもいいけど、いいレンズの本格カメラが欲しいの。覚えてます？ 生きる目的の注射」

「え？ はい。それがあんなら病院に行く、でしたね」

「心のカンフル剤になればいいけど。哲郎ね、たしか不惑を過ぎた頃かな、有名な写真コンクール

で最優秀賞をもらっていて、プロにはなれなかったけど写真屋さんやったことがあるのよ」

「分かりました、知り合いに訊いてみます」

「それと、すみません、その品物急ぐ順番なの」

「今日主人居ますからすぐ買いに行きます」

佳江は、栄子という女性も不思議な人だと思った。民生委員の職務梓はとつくに超えている。生来世話好きなのかもしれない。

佳江はさらにもう一枚の紙を栄子に手渡した。

追加された紙には、十三畳程度のプレハブ小屋、レンタルトイレ、テント、簡易流し台、ベッド、薪ストーブなどが並んでいた。

栄子は声も出さず、眼を丸くして佳江の顔を見た。

「舟源の手前で終わっている町道の上に仮設のプレハブ小屋を建てて住むか、どうなんだろう、困ったな」

行き止まりで滅多に人も来ないという道だが、調子のいい町長もさすがに良い返事はしない。

「舗装してあると基礎はブロックでも済むし、組み立てるのが楽ですぐに建つんです。それに壊して撤去するも簡単です。どうか、宜しくお願いします」

佳江はもう三十分以上説得を続けている。

「町としては町立病院に入ってもらいたいんだが」

三沢が右手の中指で机を小刻みに叩いた。

本当は栄子と一緒に来てもらいたかったのだが、今は買い物に走り回ってくれている。ここは一人で頑張るしかなかった。

「町長、そう長い間ではありません、長くても一と月です」

「説得するまでということかね」

佳江は三沢をジッと見詰めたまま口を噤（つぶ）んだ。

三沢が瞬きを繰り返した後で視線を逸らして言った、「あそこで死なれては困る、いや、他でいいということではないんだが」

三沢の本音が出た。

「死なせ方、その扱い方が問題なのでしょ？ 町長」

佳江は思い切って言った。何しろ道路管理者である町の協力なしには計画は進まない。その目的のためには大概のことは譲る気である。

「記事は或る程度こつちで創（つく）っている、ということかな？」

三沢が興味を示した。かなり解りやすい人だ。

「ええ、今日の記事はまだまだこちらへの遠慮が過ぎます」

佳江は意味ありげに笑ってみせて、さらに「特別室に泊めていただいたお礼の意味でも」とやんわりと皮肉った。

「資金的な援助は出来んよ、それでよければ」

三沢が佳江の顔をうかがった。それも返事を渋っていた理由の一つらしい。

「はじめからそのつもりはありません」

バカにするなど、佳江は心の中で怒声を放った。

「分かった、それぞれの係に言つて協力させよう。業者の紹介ぐらいはしてあげられる」
三沢は椅子から立ち上がつて胸を張った。

「ありがとうございます」

札を言つたところで佳江は涙が溢れた。肩に入れた力が急に抜けていくのを感じた。

「あの男、羨ましいかぎりだな。若いころならともかくあの歳でそこまで想われているとはなあ。
俺なんか、死にそうだと聞いたとたん金勘定しそうな家族しか持つておらんよ」

三沢は寂しそうにそう言うかと受話器を手にして苦笑した。

この日の夕方、佳江は一人哲郎のいる廃屋に入った。

哲郎は気づくことなく寝床の中で死んだように動かなかった。

八

漆黒の闇と言うのはこういう暗さを言っているに違いない。手をかざしてみても指の形がわからない。最初眩暈(めまい)すら感じた悪臭もそれほど気にならなくなった。嗅覚が麻痺したのだろうか。一体どれほどの時間が経つたのだろうか。五分のようでもあり、五時間のようなこともある。一挙に二次元の世界に入り。次いで壁の中に押し込められた。そんな感じだ。眠っているのか覚めているのか、夢なのか現(うつ)なのか、生きているのか死んでいるのか、それらを問うはずの自分自身にがだらしなくも茫然としている。目を失い鼻を失つた佳江は、耳があるかどうかを確かめようとし

で足でコンクリートの床を擦（こす）った。栄子からもらった靴がズズツと音をたてた。「まだ生きてる」と声に出してみて口もあることが分った。躰（うずくま）っている女が目の前に現れた。美簾村の頃の自分だ。その自分が闇の奥を指差して何か言っている。

佳江はハツと我にかえるとその方向に這っていった。

哲郎の毛布は冷えていた。手探りで首筋を探して脈を診た。ある。掌を額に移した。少し熱がある。浅い息が喘（あえ）いでいるように聞こえた。いつ死んでもいい。哲郎にはその覚悟があるのだろう。むしろ死なれてしまう側の覚悟が問われていると佳江は思った。

明日になれば計画したものが形になる。町長三沢の口利きで納品や工事が一日で完了することになったのだ。無理を言った代わりに代金は現金で全額、当日引き渡し時にと言われている。

それにしてもまる一日動き回って佳江は疲れていた。膝も痛い。だから、と一時は佳江も思った。

「今夜はもう一晚輪瀉旅館に泊まって明日から哲郎と一緒に過（ご）そうと。しかし佳江はその考えを捨て去った。自分の中に醜いものを感じたのだ。どうしても塵芥と悪臭に充ちた廢屋で哲郎の心に触れる必要があった。そうしなければ、よりよい生活環境づくりに向けた今日の努力が、哲郎のためではなく付き添う自分のために墮（お）してしまふからだ。他に誰一人としてそう感じるものがないなくても哲郎がそう感じ取ればすべては水泡に帰する。死の向こう側へ足を踏み入れている哲郎に追いつき、そこから先は引き返せないところまで一緒に行こうと決めた佳江にとって、それだけはどうしても避けなければならない事だった。

佳江は毛布を上げて哲郎の横に滑り込んだ。哲郎の体を温めたいということもある。しかし、今まで以上に強い刺激臭を受けて麻痺していた嗅覚が生き返ってしまった。佳江は嘔吐しそうになっ

て毛布の外に出た。

「佳江、無理をするな、もう、解かったから」

弱々しい声がときとぎれにそう言った。

「哲郎」

佳江は名前を呼ぶと同時にこみあげてきた胃液を吐いた。

九

翌日から恐ろしいほど忙しい三日間が過ぎ去った。

佳江はプレハブ倉庫の中で静かなときを過ごしていた。

目の前で坊主頭の哲郎が眠っている。何か月ぶりかの入浴が二十時間近い熟睡をもたらしたらしい。

三沢の指示の下、建て終わった小屋の隣に「輪湯町」と大きく書いたテントを張り、何処で調達したのか家庭用の浴槽をその中に置いた。福祉用の温泉タンクローリーを使って「一日温泉」を造ってみせた。おそらく所要所でビデオや写真を撮っているに違いない。そう言えば哲郎の体を洗っているときに、上空にヘリコプターが飛んでいたような気がする。哲郎は最初に見せた攻撃性はどこへやら、幼児に還ったように従順だった。擦（こす）り続ければ皮膚が全部剥がれ落ちてしまうのではないか。本気でそう思うほど垢が出た。髪は洗った後で全て剃り落した。わずかに残っている歯を磨き、縦に溝の入った爪を切って哲郎の入浴介助は終わった。

しばらくして栄子が来た。一日一回無償で哲郎の食事を届けてくれていた栄子に佳江は、自分も含めて有償の出前として配達してくれるように頼んだ。午前十時と午後四時の二回、定期的に來てもらえば日用品の買い物も頼みやすい。

外に出ると佳江は、栄子に哲郎の髪を手渡した。

「和紙に包むのが本当なのかもしれないけど」

「そんなに悪いんですか？」

民生委員の顔に戻って栄子が訊いた。

「たぶん多分エックス線で撮っても肺がまともに映らないんじゃないかしら」

栄子は息を呑んだ。

「樺山先生の所見は未だ？」

「都合をつけてきてくださることになっていますが、合併症もあるし、あの衰弱ではねえ。あ、この髪は、娘さんの真理子さんへ、ですか？」

「ええ、渡せても捨てられてしまうかもしれないませんが、関わった私たちの義務と言いますか」

栄子が大きくうなずいた。

「夫婦とか親子って何なんでしょうね。わたし、今回のことで考え込んでしまいました」

栄子がしみじみとした口調で言った。

佳江もそう思う。佳江は今度の件で貯め続けていた預金を二百万以上失った。未払い部分もあることから総額はまだ確定していないが。或る意味では圭一たちの生活を脅かす行為には違いないのだ。それなのに一言も相談しなかった。相談しても二人の意見は初めから分かっている。それに圭

一の存在も向坂医院の現在も佳江あつてのものであり、その佳江のあるのは遠い昔とはいえ哲郎の救命行為のお陰なのだ。現状から見ればいま哲郎のことを優先しても圭一たちを裏切ったことにはならない。佳江はそう結論づけた。

「窓を開けてくれないか、佳江」

哲郎の声の張りが戻っている。

「そうね、空気入れ換えましょうか」

窓を開けると潮の香りが入ってきた。

「潮の匂いは女の性器の匂い、同時にそれは死の臭いなんだ。だから嗅いでいると落ち着く」

「それで海辺なのね。でもそれかなり特殊な感覚じゃない？」

「海は女だからそうなる」

哲郎が上体をベッドから起した。少しだが顔色もいい。

「女なら死よりも誕生じゃないかしら、羊水も海の水に近いっていうし」

「女は何一つ生み出せない。生むふりをして何気ない顔で次から次へと殺していくだけだ」

哲郎は遠くを見る目をして言った。

「アウスのこと、中絶のことを言ってるの？」

「君は美篤村の頃と変わってないな」

「佳江の発想があまりにも単純だったのだろう、哲郎が咳き込みながら笑った。

哲郎が笑顔をみせた。佳江はそれだけで報われた気がして胸が詰まった。

「真理子さんに――」

哲郎の顔からスーッと笑顔が消えた。

佳江は哲郎から直接には娘の名前を聞いていない。口をついて出た名前が栄子の信用を害したのではないかと一瞬気になった。それでも「逢いたくないの?」と思いついて訊いた。

「会う理由がない」

哲郎がゆつくりと横になった。怒っている様子はない。

「親子が会うのに理由が要るの?」

佳江は布団を哲郎に掛けながら言った。

「真理子は僕の子じゃない。恵子が他の男と寝てできた子だ。分かれたのもそれが原因だよ」

「まさか、そんなこと。だって結婚してすぐのことでしょ、それなら。考えられない」

「僕がほかの女を抱いている、だから自分もほかの男に抱かれた。なにが悪いのって、そういう理屈だった」

「いたの? そのときそういう女性」

窓の向こうの海色の光が眩しかった。

「君以外にか」

「え?」

「いずれにせよ心の中のことだ。相手の想うことを許したり禁じたりできると思う方がおかしい。ましてやその報復としてほかの男の子どもをつくるなんて…」

佳江は自分の心臓が収縮する音を聴いたような気がした。

次の日、町立病院の樺山医師がプレハブ小屋に来た。

哲郎は呆けたように天井を見ていた。よだれが溢れ耳に向かって流れ出ている。明らかに昨日とは違うもう一人の哲郎がそこにいた。

「この環境、以前とは雲泥の差だな、新聞で読んだけど町長が私財を投じたんだってね。あなたもえらいが町長もすごい。見直したな、たいしたもんだ」

佳江は心の中で町長にあきれながらも、新聞記事を裏付けるべく町長への感謝の言葉を並べてみせた。

「チアノーゼがみられるし……」

哲郎の皮膚が青紫色になっている。

「血液中の酸素が減っている証拠だよ」

この後も樺山の丁寧な診察と説明は続いた。

佳江は哲郎がどこまで聞いていて、どこまで解っているのかを知りたくなかった。しかしすぐに思い直した。哲郎はきっと、全てを知っているに違いない。

「もうはつきりとは映らないかもしれないですね」

エックス線写真を撮るまでもなくということだろうか。

「すでに肺性心(はいせいしん)の状態だと思ふ。肺疾患が因(もと)で肺の血流とか換気力が低下して心臓の負担が増してね、その結果心臓が肥大して弱っていくんだ、チアノーゼそれで起こる。こ

の患者にとつて最悪という生活をしていたわけだし。やっぱり病院に運びませんか、お気持ちは解りますけど――」

「あ、先生」と佳江は話を遮(さえぎ)った。

哲郎が首を左右に動かしている。左右両方の目尻から涙が流れていた。

病院に行けばほんの少しだけ命は延びるだろう。しかし哲郎にとつてそれが何になるうか。突き詰めれば医者として死を受け容れる形を整えたいというにすぎない。

佳江は議論の蒸し返しを避けたかった。

「それで治るのなら別ですけれど」と思い切つて言った。

樺山は黙り込むと注射を二本うち、カバンをたたんで出口に立った。

「先生――」

佳江は出口のドアを軽く押さえて樺山の目を見た。

「生死の境目にいるとき、自分が生きているかどうかを患者本人が決めてもいいですよね」

樺山は虚を突かれたらしく目を瞬(しばた)かせた。

「その答えは哲学の領域です」

質問の意味は通じていた。樺山はそれまでとは違い、肩の力を抜いてゆつくりと出て行った。

十一

佳江は払暁の海を眺めていた。空の黒と海の黒が少しずつ明度を分け、遠い島影がぼんやりと浮かびあがる。それは海の黒が島の形に盛り上がったようにも見える。やがて水平線が島の両脇から

左右に引かれ、墨色の雲が太陽の出を待つ幕のように現れてくる。空は海から離れたところほど重そうにしている。濃紺、青、淡い水色の共存。雲の幕間からアサヒが覗くと、海の一点が朱色に染まり輝きながら広がっていく。目を窓の左端に転じると、いつのまにか水平線の上にオレンジ色の帯が出来ていた。

「きれいだろ」

哲郎がしわがれた声で言った。

意識が明瞭な時と混濁しているときがはっきりとしてきた。状態が悪いときは見ているのがつらかった。佳江を佳江だと認めない。たつたいま食べたことを忘れ、たつたいま排便したことを忘れた。もし哲郎がミイラのように痩せていなければ、暴れられたらきつと手に負えなかつただろう。しかしいまのところ状態のいいときはほとんど介護する必要もなく、人格そのものが昔の哲郎に近かった。それは幸いだった。社会思想史や文学のこと、写真の現像の面白さなどについて憑かれたようにしゃべり続けたりもした。記憶の内容は古いことほど確かだった。ただ、いいときは急速に減ってきている。

「起こしちゃった、ごめんなさい」

佳江は振り返って言った。

「目が覚めるってことはまだ生きてるってことだ、むしろ喜ぶべきことかも」

佳江は床に敷いた自分の布団を二つにたたむとその上に座った。

「不思議よねえ、こうしていると息子も嫁も孫もまるで別の世界の人間みたい。わたしなんか、これまで眠ってたんだか、覚めてたんだか。毎日毎日ご飯作って掃除して洗濯してお金の心配をして。」

家族ほど傲慢なものはないわ。人を雇って働かせてみれば解るのよ、それがどんなに大変でどれほど高くつくことか」

「請求書はあの世に頼む」

「あら、そういう意味じゃないのよ、人生の話。もっと大事なものを犠牲にしてるんじゃないかってこと」

「なあ、佳江、今度狂ったら殺してくれないか」

佳江は驚いて床の上から滑り下りるようにして座りなおした。

「君の家族が来る前に死にたい。君が家族に責められるのを見たくない。聞きたくない。君が僕を優しい目で見てくれてくれるうちに死にたい、だから」

哲郎の目の白濁が涙で浮き上がった。

「哲郎……」

「狂ってないときじゃ辛いからな」

「バカ言ってるんじゃないの。哲郎一人で……哲郎一人で……哲郎独りで……」

あとの言葉が出なかった。出ないことが寂しかった。この期に及んでまだ生に未練をもつ自分が浅ましかった。涙が出て、哲郎の顔が滲んだ。

黄みを増した太陽が窓ガラスの向こうで輝いていた。

十二

哲郎は具合さえ良ければ立って外のトイレまで用を足しに行った。むろん佳江は後ろから見守つ

いている。

哲郎がトイレの中に入るのを待つていたかのように、二台の車が小屋の前に止まった。栄子のライトバンと圭一のクーペだった。

圭一は犯人を見つけた刑事のように佳江に駆け寄って来た。

「いったいどういう気なの、母さん。ボケたの、それとも狂ったの。これごらんよ、うちの患者はこの話でもちきりだし、恥ずかしくって街も歩けやしない」

圭一が佳江の胸にぶつけるようにして渡した女性週刊誌の表紙には「海に咲く老いらくの恋」の文字があった。足元に落ちた雑誌が潮風にめくれられグラビアを広げた。輪瀉旅館のロビーを歩く和服姿の佳江がいた。何が書かれているかは容易に想像がつく。

「お金は！ 一体いくら使ったの、こんな乞食みたいな生活をするために。町長じゃないよな、政治家がこういう金を出すわけがない、母さんだ、そうだろ？」

「わたしのお金だよ」

佳江は声をふるわせてやっとの想いで言った。母親の体を心配して様子を聞くでもなく、どういうことなのかと説明を求めるでもない。苦勞して育てた一人息子なだけに情けなさも一入だった。「今すぐ死ぬわけ、母さん。そうならいいけど違うだろ、結局僕らにこれからの老後の負担がかかるんだ。そんなことも分らないの、情けない」

圭一の口汚い攻撃は延々と続いた。

栄子がまるで自分が怒鳴られているように圭一の一言一言に反応している。目尻を痙攣させ、時には平手打ちを受けたように顔をゆがめた。

佳江は五十歳になる息子の顔をしみじみと見た。動いている口がひととき醜かった。

「体に気をつけて」その一言は最後まで聞けなかった。

圭一がタイヤを鳴らして走り去った。道路についたタイヤの跡が、佳江にはわが子から受けた傷跡のように思えた。

「向坂さん！ 間宮さんが」

栄子の指さす方向にトイレがある。見ると、哲郎が開いたドアに寄りかかりながらずり落ちるところだった。

小屋の片隅に一眼レフのカメラが置いてある。栄子が苦勞して探してきてくれたものだが、哲郎がフラインダーを覗く日が来るとは思えなかった。そういえば哲郎は、自分の過去を、佳江の知らない空白の時間の出来事を、ほとんど口にしていない。哲郎が心の印画紙に焼き付けたものの少なさと質の悪さを思った。そしていま佳江もまた同じ状態であることに衝撃を受けていた。日めくりを過去に遡っていく作業、それは死の予感がさせることである。

そして死そのものはある日突然にやってくる。その発端は小さなことだった。

佳江が流しで出前用の井を洗っていると、哲郎が這うようにしてやってきた。

「この水はなんだ、何でここから水が出る」

「隣のあの舟源あと？ その水道から長あいホースでひいてるの」

佳江は子供の質問に答えるようなく口調で言った。

「それみる水も使えたんだ、戻る、あつちは鉄筋なんだ、こんな小屋を建てる必要がどこにある」

哲郎がずり落ちそうなパジャマのズボンを上げながら出口に向かった。佳江が慌てて組みついたそのとき、持っていた井が蛇口に勢いよくぶつかって割れた。縁の尖った井が転がる。その先に哲郎の顔がある。佳江はとっさに哲郎の首をつかんだ。喉がゴトツと小さく鳴った。親指が喉仏を押してしまつたらしい。目と目が合った。目ヤニのついた哲郎の眉毛の下に自分の顔が映っている。井が哲郎の右耳の上にコツンと当たつて止まり、鋭利な断面を上に向けた。佳江の手が哲郎の首から離れていない。哲郎が観念したように目を閉じた。

「何のつもり」

そう言うと、佳江はどんぶりを遠くに投げた。

「狂つたふりをして何をさせようというの」

佳江は唇を噛んで立ち上がった。

床に転がつている哲郎の体が揺れだした。その嗚咽が号泣に変わったとき、佳江も膝をついた。そして哲郎に重なり、拳をつくつて哲郎の薄い胸板を小さな力で叩いた。涙と涙(はな)に塗(まみ)れた顔と顔が触れ合う。

「聞こえたのね、ぜんぶ。息子が言ったこと」

佳江は哲郎の頬を撫でながら言った。

その数時間後。

哲郎がいない。浴槽を水洗いして戻った佳江は空のベッドを見て慌てた。

「まさか」

佳江は廃屋に向かつて駆け出した。舗装道路が切れてすぐの所で海の方を見た。黒く光る岩の間を薄い板のように揺れながら哲郎が水際に向かつて進んでいる。

「哲郎！ だめーっ！」

どこに行きたいのか。誰に招かれているのか。佳江は泳ぐように走った。貝殻が佳江のかかとを斬り、尖った岩が腕を擦り切った。ようやく哲郎の手首をつかんだと思つた瞬間、哲郎の脚が海水の中に入った。打ち寄せる波が哲郎の体を持ち上げ佳江のもとに返してきた。泡立つた海水が佳江の背中を撫でながら戻る。潮水が目に入り、一瞬、空の青も海の青も区別がつかなくなつた。哲郎は咳き込みながら引いていく波に身を委ね佳江の目の前で沈んだ。手首をつかんだ佳江の右手が力を失いかけている。沖の方から大きな波が来る。佳江の中に死への恐怖が生まれた。「手を放せ。逃げる」佳江を唆（そ）そのか）すもう一人の自分の声がする。哲郎はどうせすぐに死ぬのだ。もう十分に尽くした。恩は返した。手を放すだけだ、殺すわけじゃない。それは生の自分の声でもあつた。盛り上がった海が来た。いまだ。佳江は手を離した。顔を上げた哲郎がフツと笑つたような気がした。佳江は体の向きを変え海から少しでも遠ざかろうと岩の上にはいあがる。大波が左右ではじける。死の恐怖が頂点に達したとき、佳江の体は透き通つた海水に呑み込まれた。

海水が引いていく。助かつたらしい。佳江は生きていることを確かめるように恐る恐る目を開けた。「ひっ！」と佳江は息をのんだ。哲郎の目が見つめている。佳江は反射的に腕の力で後ずさりをした。まったく瞬きをしない哲郎。佳江は近寄つて瞳孔を診た。念のため脈もみた。死んでいた。

佳江は惚けたように濡れた哲郎の屍を見続けた。涙が出るまでそうしていようと思つた。

佳江は遺体を抱えて十数メートルほど動かし波に攫(さら)われぬようにした。小屋まで遺体を背負っていく力はない。佳江は栄子が定時に次の弁当を持って来るまで待つことにした。

十三

栄子の手配で消防団の若手二人が来て、その前に車で戻った栄子と一緒に来ていた樺山医師とともに哲郎の遺体を小屋のベッドまで運んだ。地元警察には樺山から状況が伝えられ、すぐに反応した警察関係者が誰よりも先に現場に着いていた。不審死でありながら早々と遺体を動かさせたのは、何よりも樺山医師の説明があり自殺であることが明確だったからだ。二人の関係が町中に知れ渡っていたこと、小屋にあった佳江の海水に浸かっていた着衣のすべてが助けようとした佳江の行為を裏付けていたこと、栄子も事情聴取の中で佳江の献身的な行為を告げていたことも大きい。

一時間ほどして現場は落ち着きを取り戻した。

佳江は小屋のドアのそばで立ち続け、黙って考えこんでいた。

栄子は井物の蓋を取って割り箸を立て、哲郎の枕元に置いた。「おなか空いたでしょ、食べてね」そうつぶやくと、掌を合わせ、長い黙禱に入っていた。

しばらくして佳江が意を決したように口を開いた。

「何から何までで悪いんですけど…」

栄子がゆっくりと振り返った。

「いろいろな届け出とか簡単な葬儀の準備とか一緒に行動してくださいませんか？ わたし、この土地に住み着く気なのでその他よろしくお願いします。それと、これから先もずっと…」

「え？ そうなんですか、息子さんの所へ帰らずに？」

「ええ、ここで何か自分でも役立てることを見つけてお礼に変えたいのよ。こんなおばあちゃんになつて何ができるかは疑問だけど」

本気だった。あと何年生きられるか分からないが、その大事な日々を、甘ったれた息子夫婦を樂にさせるためだけに費やしたくはない。それは息子の本音を聞いた以上揺るぎない想いだった。

「承知しました、何でもおっしゃってください」

「栄子さん、あらためて言いますけど、お仕事のひとつとして有償でお願いします。これはあなたに對して感じている友情とは一線を画して口にしていているところですよ」

佳江はすべて支払いが終わっている。ひとときのための施設や器具を、この地での自分の生活に役立てようと決めた。町のどこかに土地を借りようという企てだった。町長との約束通り、哲郎が亡くなった以上、原状を回復して返さなければならぬ。佳江は哀しみを超えて自分が作り出した舞台を早々に始末する行動に移つたのだった。

栄子に概要を説明すると、彼女は表情を引き締め大きくうなずいた。

「その程度の土地なら伯父がもっていますよ、ほかにも田舎ですから有閑地はあちこちに。でも失礼ですが佳江さんこれ以上の散財、息子さんの承諾とか要らないんですか」

佳江はもつともな確認だと思つた。親戚の土地が組上に載つたのだから。

「家ではなく私個人の預金が二千万ほどあったので、今回若干減りましたけどご心配には及びません。老いて子供にすぎるとは気持ちの上で嫌なので長い間ひそかに貯めていました」

栄子はそれを聞くと微笑しつつ頭を掻いた。

「あつ、そうだわ、向坂さん。樺山先生のところ看護師さんいなくなつて困つてる。スキルアップしたいつて理由で都会に行つちやつた。先生、奥さんとも死に別れだし、往診のたびに鍵掛けてる変な状態。助けてあげて」

「ありがとう、少しだけ灯りが点いたわ」

佳江も少しく微笑んだ。

栄子が早速動くと言つて車で去つた後、佳江は哲郎の手を離れた現場近くまで歩き、岩が少しふくらんだところで陽に輝いている海を見ていた。

「僕が君の手を引いて道を歩いているんだ、内臓まで染みるような冷たい青一色の中をね」

「いまのこの海みたいなの……」

哲郎が美簗村で聞かせてくれた夢の話を、そのときの彼を、佳江は目を閉じることで鮮明な画像で思い出した。

「ごめんね、海に捕まったあのとき哲郎の声で、君は生きろつて、言われたような気がするのよ」
哲郎を日々弔いながらあのときの必死さを思い出して生きよう。佳江は決意して自分自身を励ました。

遠くの沖から大きそうな波が来る。

佳江は踵(きびす)を返すと哲郎が横たわる小屋に向けて足早に歩き出した。

